經濟論叢

第141巻　第4・5号

組織民主主義の会計学……高　寺　貞　男　1

予算制度と政府計画の評価……池　上　　惇　17

高田保馬：一般均衡理論と硬直賃金……中　西　泰　之　34

経営組織論にみられる労働者の発達の側面……北　川　與司雄　52

不確実性下の意思決定理論：確率的
アプローチと Shackle の理論 ……竹　治　康　公　68

価値の実体としての抽象的人間労働に
関する一考察……伯　井　泰　彦　84

昭和63年4・5月

京都大學經濟學會

価値の実体としての抽象的人間労働に関する一考察

——〈商品で表示される労働の二重性〉と〈事実上の還元〉——

伯　井　泰　彦

I　はじめに

1970年代はじめからマルクス価値論では，価値の実体としての抽象的人間労働を，商品生産社会における社会関係に関わる歴史的カテゴリーととらえる考え方が，内外とも一つの潮流を形成してきた。この潮流をかりに〈歴史的範疇説〉と名付けるとすれば，この説のパイオニアであるルービンの主著『マルクス価値論概説』がこの時期欧米で翻訳されたことも，この気運を高めたといえよう[1]。もとより「商品で表示される労働の二重性」はマルクス自身によって「批判的な見解の秘密の全部なのだ」[2] とされているが，従来の〈生理学的範疇説〉やローゼンベルグ[3]などの折衷説は，ともすればスミスのドグマ批判な

1) ロシア語初版 И. И. Рубин, *《Очерки по теории стоимости Маркса》* Москва, 1923 г. 英語版 I. I. Rubin, *Essays on Marx's Theory of Value*, Detroit, 1972. 独語版 I. I. Rubin, *Studien zur Marxschen Werttheorie*, Frankfurt, 1973. 仏語版 Issak I. Rubine, *Essais sur la théorie de la valeur de Marx*, Paris, 1978. なお米川紀生「労働と価値に関するイ・ルービンの見解について」『一橋論叢』第61巻第5号，1969年5月，荒又重雄「抽象的人間労働と社会的労働」北海道大学『経済学研究』第22巻第3号，1972年11月，西口直次郎「I. I. ルービンの価値論」大阪市立大学『経済学年報』第38号，1978年2月，同「マルクス価値論の発生論的方法」大阪市立大学『経済学雑誌』第80巻第1号，1979年5月を参照。

2) 1868年1月8日付エンゲルス宛書簡，「商品が使用価値と交換価値との二重物 Doppelte だとすれば，商品で表示される労働も二重の性格 die in der Ware dargestellte Arbeit Doppelcharakter をもっていなければならない，という簡単なこと……これこそは，じつに，批判的な見解の秘密の全部なのだ」(*Marx-Engels Werke*, Bd. 32, S. 11)。この他1867年8月27日付エンゲルス宛書簡（*MEW*., Bd. 31, S. 326）も参照。

3) Д. И. Розенберг, *«Комментарии ко первому, второму и третьему томам»*

どごく限られた領域にしか，「秘密」を適用してこなかった。

小論では，完成されたマルクスの概念を剔抉するため，筆者自身，歴史的範疇説の立場から『資本論』現行版第一部を主対象として[4]，〈二重性〉と〈二面性〉，また〈生きた〔過程としての〕労働〉と〈商品に含まれている（対象化された）労働〉さらに〈商品で表示される（対象的形態をとった）労働〉の概念上の弁別を視角として，価値実体とその表現について考察する。限られた紙幅の都合上，完成されたマルクスの学説に至るいわゆる新 MEGA 版として公開されている諸草稿を対象としたカテゴリーの形成史的追跡や，すでに相当多数にのぼる諸説への包括的な整理検討は試みず，筆者自身の若干の論点を提起するにとどめたい。生理学範疇説ともとより歴史的範疇説内部も含めた議論の錯綜に対し，ありうべき誤解を防ぐためにも，先の視角を予め析出しておくことがより生産的であると思えるし，またそれによっておおかたの議論の擦れ違いは解消されると考えるからである。

II　doppelt と zwieschlächtig

1. 現行版におけるマルクスの使用法

「労働の二重性」をめぐる論争が，これまでかくも錯綜しつづけているのは，こう簡潔に解明されたと信じられている命題が，じつは単なる「労働」一般，「二重性」一般でもなかったこと，別言すれば，学説史の教えるところによってマルクスが古典学派の「労働一般」の批判にたち「商品で表示される労働の二重性」に到達したという事実が了解されていても，その内容が意識的な吟味をへてこなかったことに一因があったように思われる。

この検討の糸口としてまずわれわれは，〈二重性〉と〈二面性〉がとりわけ

„*Капитала*" *К. Маркса*», Москва, 1961 г.（副島種典・宇高基輔訳『資本論注解(1)』青木書店，1962年，118-119頁）。なお原著戦前版（1931年）ではルービンとボグダーノフへの折衷主義的「批判」が見られる（直井武夫・淡徳三郎訳『資本論註解(1)』改造社，1933年，148-160頁）。

4) 以下現行版（K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *Marx-Engels Werke*, Bd. 23）は *MEW*. 版原典頁のみ本文中に（S. 56）のように記す。大月書店 ME 全集版の訳文を基本にしたが，従っていない箇所もある。・・・と原語は引用者による強調と挿入，。。。は原典の強調。

労働のいかなる位相に関わって使用されているかを，第一部より吟味しておきたい。周知のようにこれはかつて zwieschlächtig の訳語問題，また doppelt との区別[5]が論争の的になったのだが，さしあたり「労働の二重性」に関わる部分につき，次のような用例がえられる。

用例A 「商品で表示される労働の二重性 Doppelcharakter der in den Waren dargestellten Arbeit」(S. 56)〔仏語版では Double caractère du travail présenté par la marchandise〕

用例B 「最初から商品はわれわれにたいして二面的なもの Zwieschlächtiges として，使用価値および交換価値として，現象した。」(S. 56)

用例C 「……商品に含まれている労働の二面的な性質 zwieschlächtige Natur der in der Ware enthaltenen Arbeit は，私がはじめて批判的に指摘したものである。」(S. 56)

用例D 「……素材的富の量の増大にその価値量の同時低下が対応することがありうる。このような相反する運動は，労働の二面的な性格 zwieschlächtigen Charakter der Arbeit から生ずる。」(S. 60)

用例E 「……それらが商品であるのは，ただ，それらが二重なもの Doppeltes であり，使用対象であると同時に価値の担い手であるからである。それゆえ，商品は，ただそれらが二重形態 Doppelform，すなわち現物形態と価値形態をもつかぎりでのみ，商品として現象するのであり，言いかえれば商品という形態をもつのである。」(S. 62)

---

5) 本節の目的はそれらが使用される分析レヴェルの判別のための手掛りを得ることである。語義自体への意味付与は当たらないとの見解もありえよう。仏語版 (K. Marx, *Le Capital*, Livre I, Traduction de J. Roy, Paris, 1872-75, Chronologie et avertissement par L. Arthusser, Paris, 1969) ではともに double とされているだけだからである。さしあたり見田石介氏のいわれるように，doppelt を二重な，zwieschlächtig を二面的・二種的なと解してよいだろう〔『資本論の方法』，弘文堂，1963年，73-79頁〕。ところで仏語版では後者の原意を強調するときのみ，à double face 両面をもった，となっている。そして現行版 doppelseitig (S. 214) はこの仏語と同義である。もし区別するとすれば zwieschlächtig が内容面から二種性，混種性を言うのにたいし，doppelseitig は外面から二側面の区別を示すニュアンスの差があると思われる。筆者は zwieschlächtig は多くの場合二種的，混種的のほうが妥当だと考えるが，訳語としては慣例どおり二面的で統一した。

用例F　「(i)この章のはじめに，普通の言い方で，商品は使用価値であるとともに交換価値である，と言ったが，これは厳密に言えばまちがいだった。商品は，使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである。(ii)商品は，その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態，すなわち交換価値という現象形態をもつとき，あるがままのこのような二重物 Doppelte として現れるのであって，(iii)商品は，孤立的に考察されたのでは，この交換価値という形態をけっしてもたないのであり，つねにただ第二の異種の一商品にたいする価値関係または交換関係のなかでのみ，この形態をもつのである。」(S. 75)〔文中の番号は便宜上，筆者によるもの〕

用例G　「この瞬間から，生産者たちの私的諸労働は実際に一つの二重な社会的性格 doppelten gesellschaftlichen Charakter を受けとる。それらは一面では，一定の有用労働として一定の社会的欲望を満たし・そのようにして自分を総労働の・社会的分業の自然発生的体制の諸環として，実証しなければならない。他面では，私的諸労働がそれら自身の生産者たちのさまざまな欲望を満たすのは，ただ特殊な有用な私的労働のそれぞれが別の種類の有用な私的労働のそれぞれと交換可能であり，したがってこれと同等と認められるかぎりのことである。」(S.87)

用例H　「私的生産者たちの頭脳は，彼らの私的諸労働のこの二重の社会的性格を，実際の交易，生産物交換において現象する諸形態でのみ反映し，――したがって，彼らの私的諸労働の社会的に有用な性格を，労働生産物が有用・しかも他人のために有用でなければならないという形態で反映し――異種の諸労働の同等性という社会的性格を，これらの物質的に違った諸物の，諸労働生産物の，共通な価値性格という形態で反映するのである。」(S. 88)

用例I　「そうすれば，労働時間は二重の役割 doppelte Rolle を演ずることになるであろう。労働時間の社会的に計画的な配分は，いろいろな欲望にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を規制する。他面では，労働時間は，同時に，共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役立ち，したがってま

た共同生産物中の個人的に消費されうる部分における生産者の個人的な分けまえの尺度として役立つ。」(S. 93)

用例J 「交換の歴史的な広がりと深まりとは，商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を展開する。この対立を交易のために外的に表わそうという欲求は，商品価値の独立形態に向かって進み，商品と貨幣とへの商品の二重化 Verdopplung によって最終的にこの形態に到達するまでは，少しも休もうとしない。」(S. 102)

用例K 「なぜならば商品という表示は，商品と貨幣商品とへの商品の二重化を含んでいるからである。」(S. 109)

用例L 「交換過程は，商品と貨幣とへの商品の二重化，すなわち商品がその使用価値と価値との内的対立をそこに表示するところの外的な対立を生みだす。」(S. 119)

用例M 「労働者は同じ時間に二重に doppelt 労働するのではない。……しかし，労働対象に新たな価値をつけ加えることと，生産物のなかに元の価値を保存することとは，労働者が同じ時間にはただ一度しか労働しないのに同じ時間に生みだす二つのまったく違う結果なのだから，このような結果の二面性 Doppelseitigkeit は明らかにただ彼の労働そのものの二面性だけから説明できるものである。」(S. 214)

用例N 「……それだから，同じ時点における労働の結果の二面性が生ずるのである。……このような労働の二面的な性格 doppelseitigen Charakters から生ずる同じ労働の二面的作用 doppelseitige Wirkung は，いろいろな現象のうちにはっきりと現れる。」(S. 215-216)

用例O 「……資本家の指揮は内容から見れば二面的 zwieschlächtig であって，それは，指揮される生産過程そのものが，一面では生産物の生産のための社会的な労働過程であり他面では資本の価値増殖過程であるというその二面性 Zwieschlächtigkeit によるのである……」(S. 351)

2. マルクスによる二重性の位相

以上A～Oの15例のなかで二重性として規定されたものは，A, E, F, G, H, I, J, K, L, の9例，二面性規定を受けたものは B, C, D, M, N, O, の6例あった。とくにこれらの用語がはじめて現れる第一章第二節「商品で表示される労働の二重性」では，節のタイトルに二重性，叙述では二面性が用いられていることもあって，事実，弁別の必要を認めない人々も多いのであるが，巨細にみればことはそう平板ではないことに気づかざるをえない。さらに立入るまえに，15例の箇所を一覧にしておこう。

使　用　箇　所	二重性	二面性
第一篇　商品と貨幣		
第一章　商　品		
第二節　商品で表示される労働の二重性……	A	B, C, D
第三節　価値形態または交換価値……	E, F	
第四節　商品の物神性とその秘密……	G, H, I	
第二章　交換過程……	J	
第三章　貨幣または商品流通		
第一節　価値の尺度……	K	
第二節　流通手段……	L	
第三篇　絶対的剰余価値の生産		
第六章　不変資本と可変資本……		M, N
第四篇　相対的剰余価値の生産		
第十一章　協　業……		O

さてまず看取しうるのは，用例 M, N, O の場合にみられる直接的生産過程における労働者の〈生きた労働〉への関説で，資本の生産過程を労働過程と価値増殖過程との統一として把握する視点に，二面性規定が結びついていること，これが第一の確認である。では単純流通[6] レヴェルでの他の12例では，ただ無造作にこれらが混用されているだけなのだろうか。

6) この概念については，向井公敏「『資本論』冒頭商品再考」(1, 2)『同志社商学』第37巻第5・6号，第38巻第1号，1986年3，6月をみられたい。

その節題にも拘らず，第二節の叙述ではいずれも二面性が用いられているのに，第三節以降この用例はなく，すべて二重性が使用されている。さてEとFは，商品を「二重なもの」(S. 62),「二重物」(S. 75) と規定している。その際Eでは「使用対象であると同時に価値の担い手……二重形態，すなわち現物形態と価値形態」とをもつ場合にかぎって，商品は「商品という形態をもつ」と規定していること，F(ii)では「その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態，すなわち交換価値という現象形態をもつとき，あるがままのこのような二重物として現れる」とみなしていることがわかる。

ところで用例Bは第二節冒頭の文で，一文おいてCがくる。しばしば，労働の二重性の発見こそマルクスによる古典派経済学の止揚を可能にしたものであるといった，文言で説示される著名な一句であるが，叙述では「商品に含まれている労働の二面的な性質」(S. 56) となっているにも拘らず，節題において，また先の1868年1月8日付以外の書簡でもマルクス自身が「労働の二重性」に関説していることなどから，表現の異同が顧みられなかったものと思われる。さきのBでは，商品が「使用価値および交換価値」(S. 56) であるとき「二面的なもの」と規定されている。「最初から」とは，第一節商品の二要因をさすとみてよい。先のEの規定と対比させるとき，Bのそれは，術語上の厳密さの点では疑問を残す可能性がでる。すなわち B, E 双方とも商品が現物形態と価値形態をもち，したがって使用価値と交換価値として現れる場合の規定であるにも拘らず，Bでは二面性，Eでは二重性が用いられているからである。

だが第三節に属する用例Fの検討によって，次のことが明らかとなる。あえて煩瑣をおして，その前後(i), (iii)を引いたのはそのためである。まず(i)でマルクスは，商品が使用価値であるとともに交換価値であるというのは，「厳密に言えばまちがい」(S. 75) という。その過誤をおかした「この章のはじめ」とは，さしあたり第二節のBさらに第一節である。では厳密に言えばどうなるのか。「商品は，使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである」。それでは，商品が使用価値および「価値」であることと峻別されるべき，使用

価値および交換価値として現れる局面とはなにか。(iii)から了解されるように，「つねにただ第二の異種の一商品にたいする価値関係または交換関係のなかでのみ」，商品は現物形態と価値形態とを合せもつ商品形態をとるのだ，マルクスはこういっているわけである。したがって「価値関係または交換関係」においてのみ，商品は「二重物」だと考えていることが明らかとなる。

そこで用例Bは，第三節価値形態論まで上向したマルクスの見地からは，次のように改められねばならない。すなわち「最初から商品はわれわれにたいして二面的なものとして，使用価値および価値として，現象した」と。では，「二面的なもの」それ自体は改める必要はないのだろうか。その必要はない，否そればかりか二面性以外の術語を用いるべきではない，むしろマルクスは，EやFと峻別すべき位相と対応させてこれをもちいたのだと，われわれが考えるのは，『資本論』初版本文のいわゆる「回り道」の直前でも，「商品はもともと，ある二面的な物 zwieschlächtig Ding，使用価値にして価値，有用な労働の生産物にして抽象的な労働膠着物なのである。だから，自分をそのあるがままのものとして表わすためには，商品はその形態を二重に verdoppln しなければならない」[7]（1A., S. 20）と強調されているからである。

すなわち商品を価値関係のなかではなく，「孤立的に考察」（S. 75）する場合，つまり商品体単独でとり出して分析する位相，それが〈二面性〉の概念に結びついており，そこでは商品は自己の価値の現象形態たる交換価値をもたず，商品体はただ現物形態という姿でしか現れない。だがこれと峻別されるべき価値関係のなかでは，事態は違う。商品は二重形態で出現し，商品の価値は交換価値として現象し価値形態で表現される。〈二重性〉とはこの後者の位相に属する固有の概念なのである。これを第二の確認としよう。それゆえ二つの確認から，〈二重性〉と〈二面性〉の用法に関して，前者は労働力の支出によって

7) 以下初版（K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, Verlag von Otto Meissner, Hamburg, 1867, Neudr., Hildesheim, 1980.）は江夏美千穂訳［『初版資本論』幻燈社書店1983年］を基本とし，Meissner 版原典頁を（1A., S. 20）のように記す。この箇所は，岡崎次郎訳［国民文庫版『資本論第1巻初版』1976年］では「二重物」と訳されており，原意が蔽されてしまう。

労働が商品に対象化されたものを，商品の価値関係すなわち労働生産物相互の物象的関係の内部において分析する際の概念であり，後者は，一方で労働者による労働力の支出つまり労働そのものをとらえ，他方で支出された労働力がただ対象化されたにすぎぬ商品を単独で分析する際のそれである点を，マルクスは十分識別していたという結論をえることができるのである［残った用例は行論で位置づけられよう］。

III　生きた労働・商品に含まれている労働・商品で表示される労働

われわれは，価値実体論と価値形態論の理解のための鍵を手にしようとしているわけだが，考察を容易ならしめるため予め範疇を定立し，そのうえで，われわれの観点から価値実体論から形態論への上向の基本問題を考察しよう。前節での展開からマルクスによる〈二重性〉と〈二面性〉の弁別の根拠は，分析視角を異にする労働の三つの位相の想定があったからであった。われわれはこれらを〈生きた労働の二面性〉，〈商品に含まれている労働の二面性〉，〈商品で表示される労働の二重性〉として積極的に位置づけなおそう。

1. 生きた労働の二面性

これは，単純流通部面では生産条件としての具体的形態を捨象したものとして，また固有には第五章以降の直接的生産過程に対応している。価値実体としての抽象的人間労働を〈生きた労働の二面性〉すなわち生産過程における「流動状態」(S. 65) の労働力の支出から具体的契機を捨象したものとして，あやまって把握したのが，いわゆる生理学的範疇説[8]であった。〈生きた労働の二

8) 生きた労働の二面性のみを「労働の二重性」の全内容とみなす見地からは，価値増殖過程の分析，有機的構成の概念規定，v＋mのドグマ批判程度の成果しかあげられず，商品論とりわけ価値論における理論革命としての意義を剔抉できない。たとえば，第一に価値の実体としての抽象的人間労働を，価値関係の内部においてのみ成立する歴史的かつ論理的概念とみるわれわれの把握からは，これまでの国際価値論や比較生産費説の存立機制そのものが問い直されざるをえまい。また第二にこの見地からは，第一部での価値量（抽象的人間労働への還元に伴う社会的平均労働力を単位とする社会的必要労働時間）と第三部における生産価格とは，対象把握における相違↗

面性〉の最も定式化された記述は，第一章第二節末尾での「すべての労働は，生理学的意味での人間労働の支出であって，同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において商品価値を形成するのである。すべての労働は，他面では，特殊な・目的を規定された形態での人間労働力の支出であって，具体的有用労働という属性において，使用価値を生産するのである」(S. 61) にみることができ，また第四節物神性第2パラグラフ (S. 85) や第五章第一節労働過程などにも示されている。すなわち〈生きた労働〉は，具体的有用労働の属性，労働対象や労働手段を捨象できない特殊な合目的的形態での人間労働力の支出の面で使用価値を生産するが，他方生理学的意味での抽象的人間労働という属性では，価値を形成する。この意味で，それは〈価値を形成する実体〉であって〈価値の実体〉ではありえない。本来的に直接的生産過程に属する生きた労働はそこでの価値形成の実体ではあっても，商品生産社会ではそれ自体は私的労働の属性であって，商品の交換価値から析出された「社会的実体」(S. 52) としての価値の実体ではありえないのである。生理学的ないし超歴史的範疇説は，この差異を誤認する謬説にすぎない[9]。したがって〈生きた労働の二面性〉は，価値実体論での主要な契機とはなりえず，主に資本の生産過程で現れる。この点を略述しておこう。

用例 M, N は，マルクスが資本の生産過程という一過程を，労働過程と価値増殖過程との両面で把握し，価値形成過程の実質が価値増殖にほかならないことを明らかにしたのち，〈生きた労働の二面性〉が価値増殖過程におよぼす「二面的作用 doppelseitige Wirkung」(S. 216) が「結果の二面性」(S. 214) に帰結することを，分析した箇所である。すなわち〈生きた労働〉は，具体的

↘する論理次元の下での同一事態に他ならず，そもそも価値の生産価格への転形というアポリア自体成立しえない。第二点については Ulrich Krause, *Geld und abstrakte Arbeit*, Frankfurt, 1979.（高須賀義博監訳『貨幣と抽象的労働』三和書房1985年），および植村博恭「〈労働の還元〉と抽象的労働」『エコノミア』第84号，1985年3月，真田哲也「現代欧米価値論の一考察」『一橋論叢』第95巻第3号，1986年3月を参照。

9) その意味で，機械制大工業の成立を価値実体としての抽象的人間労働の実存条件とみなす，いわゆる技術説も，歴史的とはいえこれと同断である。

有用労働の属性で生産手段の旧価値を新生産物に移転・保存し，他面，抽象的人間労働の属性で「価値を創造 schaffen」，つまり労働力の価値を補塡するのみならず新価値をも追加するという二面作用をはたす。かくして価値増殖過程は，単一の同時二面的過程ということができる。

ここで留意すべきは，抽象的人間労働の属性が価値を創造する schaffen となっている点であろう。事実，形成する bilden が全く用いられなくなるわけではないが，第四章から schaffen が登場する。同第二節一般的定式の矛盾で，マルクスは「等価物どうしが交換されるとすれば剰余価値は生まれないし，非等価物どうしが交換されるとしてもやはり剰余価値は生まれない。流通または商品交換は，価値を創造しない」(S. 177-178) とのべ，第三節で貨幣の資本への転化を可能にする「労働力の売買」を導入する。資本の生産過程を価値増殖過程ととらえるマルクスにとって「労働者が必要労働の限界を超えて労苦する期間は……彼のためにはなんの価値も形成しない。……価値一般の認識のためには，価値を単なる労働時間の凝固として……剰余価値の認識のためには，それを単なる剰余労働時間の凝固として……認識することが決定的」(S. 231) であったわけである。資本の生産過程を労働過程に還元したレヴェルでは，過程の主体は生きた労働であった。しかし価値増殖過程として分析するとき，過程は資本による労働力の消費であり，主体は資本となって，直接的生産過程は資本に対する賃労働の従属に転化する[10]。さらに第七篇資本の蓄積過程で，直接的生産過程の外部でも労働者階級が「資本の付属物」(S. 598-599) であることが明らかにされて，その「経済的隷属」(S. 603) たる内容が開示されるのである。〈生きた労働〉の属性たる抽象的人間労働は，「価値を創造する実体 wertschaffenden Substanz」(S. 595) に他ならない。〈価値を形成する実体〉とは，ブルジョワ社会の表層における単純流通に属する仮象[11]にすぎなかったことが，

10) すなわちa)資本の労働に対する指揮権，b)剰余労働を強いる強制関係，c)生産手段の他人の労働力を吸収する手段への転化である (S. 328-329)。

11) 小論の検討範囲をこえるが，第三部第48章 (Bd. 3, *MEW*., Bd. 25, S. 831) の次の叙述はこれを裏づけるであろう，「…労働を価値形成的として固定させるならば，その場合われわれは↗

剔抉されるのである[12]。

2. 商品に含まれている労働の二面性

われわれが〈商品に含まれている労働〉と〈商品で表示される労働〉との区別を提起するのは，完成されたマルクスの見地からは，単に労働力が支出され生産物に対象化されること，つまり商品が価値になっていることと，商品が対象的形態をとっていること，すなわち価値対象性をもつこととの論理次元の違いを確然と示す必要があったと判断するからである。このことはさしあたり商品の存在が孤立的か，価値関係においてかの相違であった。前者は形式的にみれば第一節冒頭から第5パラグラフ，第14パラグラフから第18最終パラグラフまで，そして第二節全部とみなしうる。これと関連する〈商品に含まれている労働〉の属性は〈生きた労働〉が労働力の支出により商品に対象化された事態を即自的につかまえたものにすぎず，その意味では，〈生きた労働の二面性〉規定の商品体への反射でしかない。だから〈商品に含まれている労働の二面性〉は，さしあたり価値の実体とも価値を創造する実体とも関連をもたず，ただ商品体に潜む stecken ネガティヴな属性たるにとどまるのである。

商品規定の側から言うと，この位相での商品は竹永進氏のいわゆる「価値としての商品」[13] だからに他ならないが，そこではいかにして可能かを不問にしたまま，理論上すべての生産が均一な条件下で行なわれ，社会的総労働が総需要構造に正確に対応し，すでに生産物的に個別労働が社会的労働に一致し

↘労働を生産条件としてのその具体的な姿で見ているのではなく，賃労働という規定性とは別なある社会的規定性にあるものとして見ているのである」。

12) したがってわれわれは決して労働の二面性の発見に理論的意義がないと主張しているわけではない。その解明によってこそ資本家と労働者との交換関係すなわち労働市場自体が，「流通過程に属する仮象」＝商品交換の条件と商品生産の領有法則を成立させない階級関係であることが示されたからである（S. 609）。なお生きた労働に関する用例Oは全集版では，「二重的」「二重性」と訳されているが，これは同一の資本の生産過程を資本家の側からとらえた叙述であり，訳語，内容とも二面的，二面性が正しいことはすでに行論で明らかであるから訂正しておいた。

13) 竹永進「『資本論』冒頭の価値実体規定について」福島大学『商学論集』第52巻第2号，1983年11月，190-191頁。この概念は氏の論考においている。あわせて同氏「価値形態の発展と抽象的人間労働」『金融経済』第211号，1985年4月，59-61頁をみられたい。

た事態が暗黙の前提となっている。「社会的平均労働力」(S. 53) の成立も複雑労働の単純労働への「換算」も「一つの社会的過程によって生産者の背後で確定され」(S. 59) る所与としてしか現れず，価値の大きさが労働の継続時間で計られ時間を度量標準とすること，価値量が社会的平均労働力を単位とする社会的必要労働時間に規定されることが述べられるにとどまる。それゆえ〈商品に含まれている労働〉の属性も，さしあたり「使用価値との関連ではただ質的にのみ認められるとすれば，価値量との関連では，もはやそれ以外には質をもたない人間労働に還元されていて，ただ量的にのみ認められる」(S. 60) だけである。用例Dは，〈生きた労働〉が有用労働としての属性で生産力の変化をもたらすときの使用価値量と価値量にあたえる作用への関説である。「価値としての商品」は事実上貨幣として扱われている商品であって，私的諸労働が独自の編成をとることで社会的総労働の諸環をなす商品生産社会では，ある特定の形態をとおして実現されるのでなければ，実は「思考産物 Gedankending」(1A, S. 17) でしかない。したがって〈価値としての商品に含まれている労働〉の属性に「社会的実体」(S. 52) たる内容を与えられるはずはなく，〈生きた労働〉の生理学的規定以外，何ら積極的規定をなしえないわけである。

だが価値実体規定も形態規定ももちえぬ，孤立した商品体に反映するかぎりでのネガティヴな属性に存在意義があるとすれば，かえって商品独得の社会的形態，労働の独自の社会的性格を背面から照射し，固有の実体論［第一節第6—13パラグラフ］から形態論［第三節］へのある種の架橋を構成する点であろう。理論内容にも拘らず，節題を「商品で表示される労働の二重性」とすることで[14]マルクスは，かかる逆説性を示唆したのであろう。

14) 用例Cに関してマルクスが『経済学批判』への参照を求めているのは (S. 56)，完成された見地からはなお未完成な『批判』での到達水準を配慮してでのことであろう。小論では立入れないが，さしあたり『批判』段階では「交換価値」一般として説かれているため，価値とその現象形態との区別，実体がいずれに関わるのかの判別も不十分であって，総じて価値形態論での不備は否めない。なお周知のようにマルクスが価値形態分析を完成させる契機となったのは，『剰余価値学説史』でのベーリ批判である。

3. 商品で表示される労働の二重性

〈商品で表示される労働の二重性〉が〈二面性〉ではないのは，要するに商品が商品形態つまり「二重形態」(S. 62) をとることに関連した労働の属性だからである。この意味で Doppelcharakter とは異種性の複合としてのある一つのものの性格ではなく，社会的なある一つのものの，特殊な重複性とみなすことができよう。〈生きた労働〉が特定の形態で支出され，商品として生産されて生産物に対象化されれば〈商品に含まれている労働〉となるが，商品形態をとることによって労働は〈商品で表示される労働〉となって，具体的有用労働としての属性は，使用価値に表示され，抽象的人間労働の属性は価値に表示される。したがって二重形態をとって展開するという固有の意味での〈商品で表示される労働の二重性〉は，第三節価値形態論での範疇であるが，価値実体としての抽象的人間労働に関連してしばしば陥りやすい誤謬を検討しておこう。

たとえば頭川博氏は，価値実体の生理学的把握を退ける点ではわれわれと認識を共有しながらも「現実的労働」を具体的労働とみなし［正しくは〈生きた労働〉］，結局生きた労働・商品に含まれている労働・商品で表示される労働の各々の論理次元の差異の正しい把握に失敗している。その欠陥は，価値実体の理解にもとづいた価値が価値形態をとる必然性の氏の説明に集中的に現れざるをえない。氏は「……価値とは抽象的人間労働の結晶であるのに商品の現物形態は具体的労働の産物にすぎず，従って，商品は別個の形態で抽象的人間労働の産物として現出すべき自然必然性を宿すのである」[15] と解釈され，この「別個の形態」を価値形態とみなされる。あるいは氏は初版本文の「一商品たとえばリンネルの現物形態は，この商品の価値形態の正反対物であるから，この商品は一つの別の現物形態……を，自分の価値形態にしなければならない」(1A., S. 20) という叙述をふまえられたのかもしれないが，これは回り道＝価値表現メカニズムへの言及にすぎず，けしてマルクスは具体的有用労働が現物形態をつくり，抽象的人間労働が価値形態をつくる関係にあると言っているわけでは

15) 頭川博「価値論の一基本問題」『一橋論叢』第81巻第6号，1979年6月，88頁。

ない。氏の理解とは違って〈商品で表示される労働〉は，物象相互の社会関係としての価値形態に属する範疇である。

この形態の内部で，抽象的人間労働は価値に表示され具体的有用労働は使用価値に表示される。商品価値は，対象的形態をとって交換価値として現象せねばならず，このとき相対的価値形態にあるA商品＝リンネルの価値が等価形態にあるB商品＝上着の使用価値で表示されるのである。商品形態という二重形態に関わる〈商品で表示される労働の二重性〉が，現物形態と価値形態に一対一の対応関係をもつという理解は正しくなく，「価値形態の両極」(S. 63) たる相対的価値形態と等価形態に関連するのだということがふまえられねばならない。価値の実体とはこの〈商品で表示される労働〉の抽象的人間労働という属性にほかならない。

価値が価値形態をとらねばならぬ必然性は，第一節で抽出した価値実体がそのままでは「思考産物」にすぎず，社会的実体であることは示されてもその内容は解明されなかったからである。解明は，商品生産社会の社会関係の内部，すなわち価値形態という物象相互の社会関係に求められねばならない。この点，節を改めて考察しよう。

IV 〈還元〉と〈事実上の還元〉

1. 価値実体の抽出

価値関係ないし交換関係が〈二重性〉の概念に結びつくものであることは，すでにみたが，現行版で最初に現れるのが，われわれが固有の価値実体論［実体抽出論］とみなす第一節第6-13パラグラフである。マルクスは資本制商品をさしあたり単純流通レヴェルでとらえ，多様な諸交換価値の存在と置換性を理由に，1)諸交換価値が「一つの同じもの」(S. 51) ＝価値実体を表わしていること，2)だから交換価値とは「ある実質」＝価値の現象形態にほかならないことを示した［第6パラグラフ］。そこで商品集合における二商品の任意の等置関係を「第三のもの」へ還元し［第7パラグラフ］，「共通な社会的実体」(S.

52）として抽象的人間労働を抽出したのである［第11-12パラグラフ］。こうして「ある実質」つまり労働生産物の価値が，社会的実体の凝固であることが示されたが，社会的実体は「同じ人間労働」「無差別な人間労働」という同質性・同等性以外，社会性の内実は与えられなかった。冒頭の価値概念の極度の抽象性・観念性は，商品生産に携わる労働の社会的性格の独自な形態が与えられぬまま，冒頭商品が「価値としての商品」とみなされたからである。ともあれ抽象的人間労働を〈同等性〉として析出した第一節の等置関係は，いわば価値実体抽出等式ともよべるものであって，その作用すなわち〈還元〉とは交換価値または交換関係を還元することで，社会的実体である価値の実体が抽出されることにほかならない。

マルクスの叙述は，第13パラグラフで「価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値」(S. 53) から離れる旨告げ，以降第三節まで〈商品に含まれている労働の二面性〉次元にとどまる。商品世界では具体的には種々の商品体が実存するのみであって，価値実体たる抽象的人間労働がそのまま現象することはできない。私的労働が社会的労働の諸環に転化するには，私的諸労働が労働としての同等性をもって直接関係するのではなく，独自の社会的形態を与えられることにより，物象相互の社会関係が成立しなければならない。これが価値関係である。

2. 価値の表現

マルクスは用例Eでみた二重性についての固有の思想を披瀝し，「商品の価値対象性［が］……商品と商品との社会的な関係のうち」(S. 62) つまり物象の社会関係にしかあらわれぬことを強調する。ところで第三節の等式は，第一節とは異なった内容をもっているが，それは，相対的価値形態にある商品が，等価物たる別商品の身体を材料として，自己の価値を能動的に表示する価値表現メカニズムである。ゆえに等号の両辺は，「不可分な契機」(S. 63) ではあるが役割の異なった「対立する両端，すなわち両極」であって，価値実体抽出

等式が〈同等性〉を主内容としたのにたいし，価値表現のそれは〈両極性〉を特徴とする。商品世界における労働の独自の社会的性格は，物象相互の社会関係としてのみあらわれるが，これは価値形態による価値表現＝物象的表現のメカニズムで解明されるので，現行版よりもむしろ初版本文の相対的価値の第一形態が，内容をよく開示している[16]。

20エレのリンネル＝1着の上着という等式においてリンネルは「自分を，自分に等しいものとしての・他の一商品である上着に，関係させ……自分に他の商品を価値として等置することによって，自分を価値としての自分に関係させる」[17]（1A., S. 16）のだが，留意すべきは，リンネルがいきなり自分を上着に等置するのではないことである。それではいわば勝手に，自分は価値として上着に等しいからいつでも上着と交換できると言うに等しい。現行版相対的価値形態の内実では，前提としての同質性への言及により必ずしも明確でなかった，上着を価値物とする，つまり「自分自身の価値実体の対象化として」（1A., S. 16）扱うのだという規定関係がふまえられるべきである。リンネルが自己の価値を表現するには上着を自分の価値形態とせねばならない。これが「別の商品を等価物として自分に等置する」（1A., S. 20）という価値表現の回り道である。初版では商品世界の社会関係が，物象相互の社会関係としていわば「商品語」（S. 66）で，解明されているのである。

現行版価値形態論では，一歩進んで労働の社会的規定とその独自性が剔抉され，その意味で価値表現にとどまらぬ価値実体の社会性の表現が試みられている。これを可能としたものが，相対的価値形態の内実論第5パラグラフの〈事

16）現行版が，相対的価値形態と等価形態とに同様の比重を置き，価値形態の発展にそくして「貨幣の謎」（S. 62）を解くとともに，労働の社会的性格の独自性の解明を目指しているのにたいして，初版本文は，相対的価値形態を中心にした価値表現と，物象的社会関係の分析が目指されている。

17）この重要な箇所は江夏訳，岡崎訳とも誤訳なので，久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店，1957年，57-59頁，武田信照『価値形態と貨幣』梓出版社，1982年，186-188頁，にもとづき訂正した。なお『資本論』諸ヴァリアントについても，武田，同書，第3章をみよ。

実上の還元〉に他ならない[18]。

「たとえば上着が価値物としてリンネルに等置されることによって，上着に含まれている労働は，リンネルに含まれている労働に等置される。……上着を縫う裁縫は，リンネルを織る織布とは種類の違った具体的労働である。しかし，織布との等置は，裁縫を，両方の労働のうちの現実に等しいものに，人間労働という両方に共通な性格に，事実的に tatsächlich 還元 reduziert するのである。このような回り道をして，そのさい dann，織布もまた，それが価値を織るかぎりでは，それを裁縫から区別する特徴をもたないということ，つまり抽象的人間労働であるということが，語られるのである。ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自な性格を顕わにするのである。というのは，この等価表現は，異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を，事実的に，それらに共通なものに，人間労働一般に，還元するからである。」(S. 65)

マルクスはまず，リンネルの価値表現のための・上着を価値物とするリンネル自身への等置という物象関係を媒介として，生産物に含まれている労働の等置が成立するという。この労働は〈商品で表示される労働〉ではなく，人間労働力の支出すなわち〈生きた労働〉の対象化であって，価値の実体ではありえない。ところでそれにともなう異種の〈生きた労働〉たる裁縫の織布への等置

18) 相対的価値形態の内実論，とくに回り道と〈事実上の還元〉についての理解は，諸説の整理も含めて，福田泰雄「相対的価値形態の内実」『一橋論叢』第96巻第2号，1986年8月を参照されたい。歴史的範疇説の支持者の中にもみられる混乱は，労働の社会性の追求に急なあまり，価値表現メカニズムと事実上の還元を中心とする第三節価値形態論の独自な内容を抜きにして，第一・二節と第四節物神性論の労働に即した商品世界の社会関係の分析とをいきなり結びつけてしまう傾向である。それはルービンやブタエフ（イー・ルービン「マルクスの体系における抽象的労働と価値」河野重弘訳『マルクス経済学の根本問題』共生閣，1929年，カズベク・ブタエフ「社会的労働の性質に関するマルクスの学説」『資本論研究』第二輯改訂版，ナウカ社，1933年）と同様，抽象的人間労働を商品世界における労働の社会的形態とみなし労働の概念から価値概念に上向しようという顚倒に陥る。これでは，正しくは商品〔形態〕がその社会的形態であり商品世界の社会関係とはこの物象的関係以外にはない，というマルクスの思想が看過されることになろう。初版序文はいう「ブルジョワ社会にとっては，労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的細胞形態なのである」（1 A., S. viii, *MEW.*, S. 12）と。その点 G. Deleplace, *Théories du Capitalisme*, Paris, 1981. が，そうした顚倒から免れているのは評価されよう。

は，裁縫を「事実的に」生理学的意味での人間労働の支出としての抽象的人間労働に「還元」する。価値の物象的表現が，初版での回り道だった。現行版は，等価物たる上着の等置を媒介として，生産過程でそれをつくり価値を形成する裁縫という〈生きた労働〉も抽象的人間労働へ〈事実上の還元〉がなされることを，回り道の内容として解明し，そのさい生きた織布も抽象的人間労働へ還元されるという仕組みを開示したのである。

このことは等価形態の第2の独自性で「織布は織布としての具体的形態においてではなく人間労働としての一般的属性においてリンネル価値を形成するのだということを表現するためには，織布にたいして，裁縫が，すなわちリンネルの等価物を生産する具体的労働が，抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として対置される」(S. 72-73) という，「ねじ曲げられ」た事態として把握される。すなわち，商品生産社会では個々の〈生きた労働〉が，人間労働としての共通性を根拠として社会的連関を結びうるのではない。ある個別の私的労働が生産物を価値として扱うことで，回り道という物象的連関にともなった〈事実上の還元〉をとおして，等価物をつくる生きた具体的労働をそのままで抽象的人間労働の実現形態とし，それゆえ第3の独自性として「私的労働でありながら，しかもなお直接に社会的な形態にある労働」として，自分をこれに関係させることによってはじめて，抽象的人間労働という属性において，社会的総労働の諸環への転化をおこなうのである。かくして物象相互の社会関係としてしか成立しえないという，商品生産社会における労働の独自の社会的規定が明らかにされる。「さきに商品価値の分析がわれわれに語った一切のこと」(S. 66) すなわち第一節価値実体抽出＝還元が析出した抽象的人間労働の社会性，その社会性の所以を今度は価値表現＝事実上の還元が開示するのである[19]。

19) それゆえ抽象的人間労働の抽象性も，〈商品に含まれている労働〉と〈商品で表示される労働〉とでは内容を異にする。前者では商品がすでに価値であることを前提として（価値としての商品），種々の労働の具体的属性の思惟による分離・捨象をいい，これを価値実体とみなした生理学的範疇説では価値の意味内容を結局，それらが皆人間同士の労働だという点に求めた。だが後者の歴史的範疇説では，個別労働が予め社会的労働として組織されていない商品生産社会において改めて私的労働の営みを社会的労働に転化する固有の形態を価値形態と把握し，よって価値／

V おわりに

小論では紙幅の関係上，単純な価値形態の・相対的価値形態の内実，等価形態の若干にしか関説できない。マルクスの分析は，このあと価値形態の発展に進み，第四節物神性論で労働に即した商品世界の社会関係の総括を行なう。〈商品で表示される労働〉は価値形態に固有に属する概念であったが，価値形態にともなう〈事実上の還元〉における生きた異種労働の抽象的人間労働への還元と私的労働の社会的労働への転化は，複雑労働の単純労働への換算・社会的平均労働力の形成をなして，生産過程で支出され商品価値を形成 bilden している労働分量を社会的必要労働時間に還元して，価値量の社会的規制として完成するのである。

先の用例Gは，労働生産物が物象的社会関係の内部で〈商品で表示される労働の二重性〉に媒介されて価値対象性を受取った「瞬間」，〈事実上の還元〉によって生きた労働も二重性を受取ることをのべた部分であり，Hとともに〈二重性〉概念が私的労働の社会的労働への転化を本質として内包するものであることをよく示している。Iは個別労働が最初から社会的労働として組織されている共同社会＝「自由人の連合体」(S. 92) での直接的な社会性にたいする言及である。またJとK，Lは単独の商品体での使用価値と価値という内的な対立＝二面性が，価値形態という外的な対立＝二重性によって表示されることをふまえて価値尺度としての貨幣の成立をのべたものである[20]。

以上のように私的生産過程にて形成された価値は，物象的社会関係である

〉の内包も私的労働の超感性的な社会性・交換可能性の立証となる。織布の社会性が仮にリンネルそのものに存しておれば何ら抽象性はもたないが，実際には「価値鏡」(S. 67) たる上着に投影されて（物象的価値表現）はじめて立証されるのである。

30) J, K, L にいう「商品と貨幣〔商品〕とへの商品の二重化」とは，価値表現のための「二つの商品の関係」(S. 75) ＝価値関係の直接の発展であり，これに伴い生成する貨幣は，本質的かつ第一義的に，現実の商品が価値として関係しあうための一般的等価物＝価値尺度としての貨幣であって，ここにマルクス貨幣論における貨幣の価値尺度機能の論理的先行性が確認される。この点，楊枝嗣朗「マルクスの貨幣形成論」『金融経済』第187号，1981年4月を参照。

「一つの社会過程によって生産者の背後で」(S. 59) 社会的実体として還元されて，価値としての社会性を獲得する。その解明のキー・コンセプトが〈商品で表示される労働の二重性〉と〈事実上の還元〉にほかならなかった。

(1986. 12. 26.)